現代思想三四巻一一号（10月号（96～101ページ）
特集＝脳科学の未来

自由意志は存在しないか

前野 隆司

1. はじめに

「自由意志」は存在するのか、しないのか。この問いは、古くからの哲学的課題のひとつであった。

十八世紀フランス唯物論の哲学者ラ・メトリ（一七〇九年―一七五一年）は、『人間機械論』の中で、心は脳によって作りだされたものであって、自由意志は幻想だといった。もちろん、自由意志は幻想だと言ったからといって、私達の心の中に存在している意志が今すぐ消えてなくなるわけではない。私たちが自由だと感じるこの意志は心の中に確実に存在しているように思える。

十八世紀イギリス経験論の哲学者ヒューム（一七一一年―一七七六年）は、私たちの心は決定論に従っているが、あたかも自由意志が存在するかのように感じているのだと考える。ヒュームは、「自由」という言葉の定義のあいまいさが、自由意志の問題を複雑にしているという。つまり、ヒューム流にいえば、決定論から自由か、というときの自由と、鎖や牢獄のような外的束縛から自由か、というときの自由は異なり、ヒューム自身は自由という言葉を後者として用いるのだという(1)。つまり、すべてのできごとが因果的に決定されていることは認めるけれども、他人による強制や外的障害があるのではなく、行為者が自分の意志で行為を決定していると感じているならばそれを自由と呼ぼう、という考え方である。

私も、物理現象から独立な自由意志などというものは存在せず、自らが行うある種の行動決定を、人はあたかも自由に行っているかのように感じるから、それを名づけて自由意志と呼んでいるに過ぎないと考える。

2. 古典的科学者の立場

まず、ここでの私の立場を明確にしておく。

ここでは、私は、『物理現象も心的現象も客観的に観測可能である』、それから、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』という仮定のもとに議論を進める。

もちろん、これには様々な立場からの反論があろう。

まず、物理現象は、客観的に観測可能ではない。量子論の基本となる不確定性原理によれば、現象に影響を与えずにミクロな現象を観測することはできない。したがって、現象は一意には定まらない、言い換えれば、現象は決定論には従わない。しかし、これは素粒子の世界の話であり、私たちが生活する時空間スケールで生じる現象においては、ニュートン力学のような古典的近似を用いても問題は生じない。もちろん、ニュートン力学の近似の範囲内では、現象に影響を与えずに観測することは可能であり、現象の原因と結果の関係は一意に定まる。つまり、古典力学が成り立つと仮定できる場においては、原因が明確ならば結果は決定される。

心的現象も、客観的に観測可能ではない。したがって、他人がフェノメナルな意識を持つかどうか、つまり、他人が哲学的ゾンビであるかどうかはわからない。また、心を持った私たちが、心について客観的に語ることは本来できないと考えることもできる。このことは不確定性原理とよく似ている。しかし、ニュートン力学と同様に、脳と心を論じる際にも、両者の振舞いについて客観的に観測可能であるという仮定を置く古典的な立場があり

うる。

また、いまはやりの心の哲学では、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』と考える明確な根拠が見出されないからこそ、現象的意識の問題が〈難しい問題〉なのだということが出発点になっている。これに対する反論をすることもなく、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』と仮定するなど、心の哲学者から見ると暴挙か無知にしか思えないかもしれない。

この点についても、先ほどと同様、物理現象と心理現象のアナロジーから、立場の関係について語ることができる。

物質は万有引力を有する。しかし、なぜ、地球という物体から、引力というものが生じるのかは、考えてみれば不思議である。地球というモノからカテゴリーの異なる引力という現象が生じるという理由やメカニズムを、実は誰も知らない。ただ、私たちが生活する時空間スケールにおいて、万有引力の法則が十分な精度で成り立っているから、そのような経験則があると考えられているだけである。

もし、『物理の哲学』というものがあったとすると、モノである地球と現象である重力との関係をつなぐことこそが〈難しい問題〉なのだということになるかもしれない。これに対する反論をすることもなく、『物質のかたまりである地球には重力が生じる』と仮定するなど、『物理の哲学』者から見ると暴挙か無知にしか思えないかもしれない。しかし、一般にそう言われないのは、物理学の世界にチャーマーズが現れなかったからであろうか。

つまり、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』という仮定のもとに物的一元論的議論を進める古典的な立場がありうる。いや、そもそも、科学は様々な仮定のもとでの議論なのであるから、このような立場はむしろ一般的な科学的立場であるといえる。必要なら、『万有引力の法則』に対応させて、『心の法則』と呼んでもいい（冗談だが）。しつこいようだが、もう一度言うが、『心の法則』がなぜあるのか、ということが、チャーマーズや心の哲学者の最大の関心事なのだが、ここでの主題は異なるのである。

ここで論じたいことの範疇は、万有引力がなぜ生じるのかについての謎の吟味ではなく、それを認めたときに、万有引力によって惑星や自動車の運動がどうなるのか、ということなのである。同様に、脳からなぜ心が生じるのか、あるいは、脳から心が生じるという言い方自体がおかしいのではないかというような議論ではなく、脳から心が生じたとして、では私たちの心はどのように振舞っていると捉えるべきなのか、という話なのである。

心の哲学に興味を持つ人はさほど多くはないにもかかわらず、心の哲学という視点がはやりすぎていると思う。九十九パーセントのふつうの人が素朴に知りたいことは、私と同じ古典力学的仮定のもとでの素朴な答えなのではないかと思うのである。

しかも、注意していただきたいのは、古典力学は、私たちが生活する時空間スケールにおいては、０．００１パーセントも誤差がないということである。つまり、ニュートン力学は、完全に正しくはないけれども、極めて正確（＝極めて誤差が小さい）である。同様に、古典的な場を仮定したもとでの心の解釈は、完全に正しいとはいえないけれども、極めて正確（＝極めて誤差が小さい）であって一般の人を説得するには十分である、というようなケースがありえるのではないかと思うのである。百パーセント正しいかどうかというぎりぎりの議論に興味を持つのが哲学者、わずかな誤差はあるが極めて正確な近似に基づく議論なのだからよしとしてむしろその仮定の内部における結果の吟味に興味を持とう、というのが私の立場である。

3．「決定論」「予定調和」「運命」の吟味

前述の仮定のもとで、すなわち、古典力学的立場のもとで、まず、「決定論」を吟味しよう。

決定論とは、世の中のすべての現象の将来はあらかじめ決定されているという考え方である。自由意志による選択は存在しない。

現在のあらゆる物質の状態が数式で記述できるのであれば、未来はすべて予測できる。未来がすべて予測できるならば、すべてが決定されていることと等価である。ラプラスの悪魔といわれる考え方である。

現代科学においては、この問いを否定する論拠がふた

つある。ひとつは不確定性原理、ふたつめが複雑系の科学である。

不確定性原理については既に述べた。心のメカニズムを解明するためには素粒子論を持ち出すべきである、という人もいる。たしかに、意思決定の不確定性は、素粒子論と直感的に似ている。しかし、両者は異なる。すなわち、脳の神経回路網の働きは、一般には古典力学や古典的な電気工学の範囲内で説明される。したがって、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』という仮定のもとでは、古典的学門の範囲内での神経回路網のインタラクションの結果として、心が生み出されていると考えるのが自然である。コネクショニストの立場である。神経回路の振舞いは、近似的には簡単な一階微分方程式で記述できる。物体の力学的振舞いは二階微分方程式だから、それよりも簡単なくらいである。もちろん、脳には一千億個の神経細胞があるから、一千億元連立方程式を解かなければならないので簡単ではないが、正確な天気予報をするためには本来空気中の分子一個一個の挙動を連立して解かなければならないことを考えれば、やはり脳の方程式の方が簡単である。

ただし、神経細胞の入出力関係には強い非線形性がある。複雑系の科学によれば、非線形性のある複数のシステムが相互作用するとき、結果はカオス的になるため予測困難となる。したがって、こちらの不確定性が、心が予測困難であることに関係する。

複雑系の科学とは、初期値のわずかな差によって、未来は大きく変動する、というものである。複雑系の科学に従うと、未来がどうなるかは物質的な原理により決定されているけれども、未来は決して正確には予測できないということになる。

したがって、古典的な力学や電気工学に従うと考えられる神経回路網の働きは、初期値が決まればすべて決定されるのであるが、複雑系である一千億個もの神経細胞の状態およびそれを取り巻く外界の状態がかつてと全く同じになることはありえないので、結果として、未来は予測不可能である。このため不確定的に見えるのである。しかし、自由意志の存在が何か未来を変える力を持っているから未来は決定されていないのではない点にご注意いただきたい。

つぎに、「予定調和」を吟味しよう。

「予定調和」とは、将来の自分がどうなるか、すなわち、どのような調和状態になるかは、すでに予定されている、という意味である。

素粒子論によれば、未来は不確定なのであるから、予定調和ということはありえない。しかし、先ほども述べたように、古典力学的な近似が成り立つと考えられる脳の世界では、ラプラスの悪魔は近似的に生きている。したがって、現在の状態さえ決まれば、将来の自分がどうなるか、すなわち、どんな調和状態になるかは、すでに予定されている、といっても近似的にほぼ問題ない。

最後に、「運命」を吟味しよう。

「運命」も決定論や予定調和に近いが、予見的な意味はあまりない。「運命やいかに」というように、その人の未来世界での相互作用の記述に使われることもあるものの、より一般的に使われる場面は、過去から現在までを振り返って、「こうなるのは運命だったのだ」というときである。

既に述べてきたように、私たちの脳が働く時空間スケールにおける現象の記述は、古典力学的な近似で十分である。古典力学にはラプラスの悪魔が生きているので、運命は決まっているといえる。ただ、脳は複雑系なので、運命の予測は困難である。

つまり、『物理現象も心的現象も客観的に観測可能であり』、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』のであり、脳の神経細胞が古典力学的な振る舞いをするならば、初期値さえ決まれば将来の振舞いは決定されているが、複雑系なので予測は困難である、ということになる。

以上の論点とは別な理由から、そもそも自由意志は存在しないと考えることができる。このことについて次章で述べる。

4．「受動意識」の吟味

「意志」は何ものからも自由である、ということを強調するために、わざわざ頭に「自由」という文字を付けて「自由意志」という。しかし、私は、意志は無意識的な過程に対して自由ではないと考える。

ベンジャミン・リベットの有名な実験から明らかなように、私たちの意識下に存在するように感じられる自由

意志は、無意識的な過程に追従している(3)。このように、無意識的な情報処理に追従して意識的な現象が生じる様子を、私は「受動意識仮説」と呼んでいる(4)。

受動意識仮説とは、『「意識」は「無意識」下の自律分散的・ボトムアップ的・無目的的情報処理結果を受け取り、それをあたかも自分が行ったことであるかのように幻想し、単一の自己の経験として体験した後にエピソード記憶するための受動的・追従的なシステムである』というものである(4)。

つまり、「意識」は「無意識」下の処理をバインディングし統合するためのシステムなのではなく、既に「無意識」下で統合された結果を体験しエピソード記憶に流し込むための追従的なシステムに過ぎないと考えるのである(2)。したがって、「自由意志」であるかのように体験される意図や意思決定も、実は「意識」がはじめに行うのではない。

私たちは、「自由に何かを欲する」ということ自体を自由にコントロールすることはできない。すなわち、自由意志は極めて不自由である。これは哲学者が行ってきた議論であるが、受動意識仮説によればこれの説明は極めて容易である。「自由に何かを欲する」こと自体が、本当は自由ではないのに「自由に何かを欲して」いたかのように幻想していたに過ぎないのであるから、それを自由にできないのは元来当然なのである。ヒュームが言うように、本当は不自由であるのに、あたかも自由意志が存在するかのように私たちが感じているから、比喩的に「自由意志」と呼ばれているに過ぎないのである。

5. 形而上学の吟味

残された問題は、私たちの生活する時空間スケールにおいて、ニュートン力学が成り立つように、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』という仮定が成り立つのかという点である。

現象学的立場から見ると、そもそも右の仮定自体が形而上学的であり、その仮定を取り去るべきであるということになる。その結果、最後に疑いようのないものとしては、心さえも括弧に入れた純粋意識だけが残ると考える心的一元論が導かれる。

心の哲学の立場から言うと、そのような仮定が不十分であるからこそ、物質とは別のカテゴリーに属する心が存在する心身二元論が導かれる(5)。

右の仮定に基づく物的一元論と、現象学的な心的一元論と、心の哲学のいう心身二元論と、（さらには、不滅の霊魂が存在すると考える宗教的な心身二元論もあるが、ここではそれは置いておくとして、）いずれが正しいのであろうか？

この問いこそが、形而上学的である。したがって、いずれが正しいかを断言することはできないが、強いて言うならば、いずれも妥当であるというべきなのではないであろうか。

本稿で一貫して述べてきた私の立場、すなわち、『物質である脳の神経細胞の相互作用の結果として心や意識や自由意志が作り出された』という仮定が確実に成り立つケースは、意識や自由意志が幻想であり、実際には存在しない場合である。つまり、心や自由意志が、物とは別の何かとして生み出されたのではなく、バーチャルな幻想として作り出された代物である場合である。

これまで、「自由意志」は幻想であり、無意識下の過程から独立した自由意志は存在しないと述べてきた。ただ自由意志であるかのように感じられるだけである。そう感じる理由は、脳がそう感じるように私たちの情報処理機構を作ったからである。

「意識」は自由意志による意思決定をしていないわけであるから、体験をするだけのシステムであるといえる。それではその体験のクオリアがどれだけ確実なものであるかというと、自由意志が幻想であったのと同様に、幻想なのだと考えられる。ここに確実にクオリア体験であるところの意識が存在しているように、脳のプログラムが私たちに幻想を見せているだけであって、そんなものは物理現象から独立に存在しているわけではないのである。このように考えると、物的一元論が妥当であるという結論が導かれる。

いや、ここに確実に存在している意識のクオリアが幻想であって存在しないとは信じがたい、とおっしゃる方もおられようが、確実になど存在していない。意識は実は断続的であるのに連続的であるかのように錯覚するようにできているのだということが知られているし、寝ているときには存在しない。生まれる前にも死んだあとにも存在しないのだから、むしろはじめから存在しない

と考える方が、連続性が保たれていて自然である。今は存在するように思えても、そのうち消えてなくなるのであるからまさに幻想である。この世に生を受けたおかげで、生きている間だけとはいえ、本来ないものをあるかのように感じられただけラッキーだと思えば、死を恐れる必要もなくなるというものである。

さて、現象学的視点に立つと、少なくとも心なしには脳という概念さえも存在しないわけであるから、心のない世界は何の定義も意味もないのっぺらぼうの世界である。つまり、心なしには何もない。いや、心という定義さえも、この意識が作り出したものなのであるから、心という定義をも取り去った後に残る、自分の純粋意識のクオリア以外には何もない。したがって、心的一元論が妥当である。

両者の主張の一部をいずれも認めることにより、物と心の世界がいずれも確実に存在すると考えるのが、心身二元論である。もともと、見方によっては物的一元論も心的一元論も妥当であったのであるから、両者を結合した心身二元論の主張が生じることは容易に想像できる。

したがって、いずれかが正しいと考えるべきではなく、いずれかが正しいのではないかと問うこと自体が無駄なのである。ニヒリズムである。

にもかかわらず、私が物的一元論をベースに議論してきた理由は、科学的思考をそこに乗せることができるからである。一方、他の二つの考え方は、哲学的には成り立つものの、物や心の科学的理解の発展には寄与しにくい。なぜなら、これらは、もともと物的一元論を基調とする科学的立場とは相容れないからである。

したがって、そろそろチャーマーズブームは終わりにし、思想的には、世界はニヒルであり自由意志が存在すると考えるのは無駄であることを受け入れるとともに、科学的には、幻想であるところの私たちの自由意志や意識の構築法についての議論に的を絞るべきなのではないかと思うのである。

註

（1）泉谷周三郎『ヒューム』（清水書院、一九八八）

（2）前野隆司、意識の起源と進化―意識はエピソード記憶のために生じたのか，現代思想三四巻二号，二〇〇六年二月，二二四‐二三九頁

（3）ベンジャミン・リベット『マインド・タイム 脳と意識の時間』（岩波書店、二〇〇五）

（4）前野隆司『脳はなぜ「心」を作ったのか―「私」の謎を解く受動意識仮説』（筑摩書房、二〇〇四）

（5）デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識する心 脳と精神の根本理論を求めて』（白楊社、二〇〇一）

（まえの　たかし・ロボティクス）